

身体を介した関わりと保育者の専門性との関連 —子ども理解に基づく話し合いとは—

Nonverbal communication and its relationship to the professionalism of the child care provider
—What is a discussion based on understanding the child—

水上 茜
Akane Mizukami

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 修士課程

キーワード：保育, 話し合い, 対話
Key words : Childcare, Discussion, Dialogue

1. 研究目的

5歳児クラスの中で保育者と子ども達との対話的な活動(「話し合い」「サークルタイム」「こども会議」等)は、多くの保育現場で日常的に行われている実践の一つである。近年、保育者と子どもたちが対話的に話し合うことの重要性が語られた学術的論文や書籍、実際の対話的な活動場面を撮影した映画が注目され、幼児期の対話的な活動に対して関心が高まっている。

大豆生田、豪田(2022)¹⁾ 請川(2016)²⁾は、幼児期に対話的な活動を経験することの重要性を述べた上で、実際の活動場面から保育者が子ども達に対して問いかける内容の紹介や、その場で保育者が子ども達に対して問いかける内容が、対話的な活動を促す一助になっていることを述べている。しかし、どちらの先行研究も、どんな話し合いであったのか。保育者がどのような問いかけをしていたのか等、「話し合い」の“内容”について述べられているに留まっている。

筆者は幼稚園教諭として日々クラス担任をするなかで、クラスの子どもの達とともに「話し合い」活動を行ってきた。その際、担任が発した問いかけに対して、同時多発的に子どもが答えることや、反対に何も発話がない場面など、様々な場面が複雑に絡み合いながら「話し合い」が刻々と変化していくことを体感した。さらに、「話し合い」では保育者の発話や関わりによって流れや雰囲気が一変してしまうこともある。一度発した言葉は元には戻らない怖さを抱えながら「話し合い」を進めていた実感も持っている。

筆者の経験から「話し合い」が始まった瞬間から発話が積み重なっていく。そこへ立ち現れる子ども達の反応や発話に対して保育者が関わりや話題を変えていたことが結果的に「話し合い」の解決や収束に繋がっていたことが実践の経験から思い起こされる。まずは「話し合い」のなかで保育者と子ども達の対話はどのようになされているのか、「話し合い」のなかで行われている相互行為の実態を探ることが必要であると考えられる。

そこで本研究は、常に変化する「話し合い」がどのように構成されているのかを明らかにすることを目的とし、「話し合い」のなかでどのようなことが行われているのかについて詳細に分析することを試みる。

さらに、保育者や子ども達の発話の積み重なりだけではなく、発話とともに立ち現れる保育者の身体を介した関わりについても同時に見ていく。そのことから「話し合い」のなかでみられる保育者の身体を介した関わりと発話には関連があつて、その関わりと発話を常に変化させながら「話し合い」ができる。「話し合い」のなかで瞬時に関わりを変えられることが保育者の専門性の一つであると考えられるのではないかとということにも触れていきたい。

2. 研究実施内容

①対象園の選定

研究対象園は筆者の元勤務先である幼保連携型認定こども園A幼稚園を選定。として、A幼稚園の5歳児クラスは、常的に「話し合い」活動が行

われていること。他園からA幼稚園の視察が日常的にあること。以上の事柄から、外部の大人が園やクラスに来て子ども達を観察することが子ども達にとっての大きな負担にはならないと考えられる。

さらには、保育者自身が日常の保育の振り返りをするために保育中にビデオ撮影をすることも日常的に行われているため、子ども達がビデオで撮影されることに対する負担は少ない点が挙げられる。

②研究対象者の選定

令和6年度5歳児クラスの担任であり、A幼稚園に8年間勤務し、保育実践経験が10年以上ある佐藤先生(仮名)に依頼をした。佐藤先生には、子ども達と保育者が全員集まって「話し合い」をする場面でのビデオ撮影、保育前後でのインタビューについての承諾を得た。

③倫理的手続き

生命科学研究倫理審査研究において、10月に承認された(06-014)その後、対象クラスの保護者に対して研究内容の説明を行い、承諾を得た。

④方法

研究者は元職員であるため、参与観察者としてクラスの活動に参加をした。

毎年11月にA幼稚園の年長児クラスが取り組んでいる「お店屋さんプロジェクト」に向けた「話し合い」を令和6年度10月28日から11月22日かけて撮影をした。

子ども達の登園前、降園後に佐藤先生へ「話し合い」についてのインタビューを行った

話し合いの撮影には、3台のビデオカメラを使い、保育者のみのカメラと子どもたち全員が写るように2台のカメラで撮影した。同時にICレコーダーも使用した。録画を再生し、「話し合い」保育者と子どもの言動を書き起こして分析の資料とした。

「話し合い」を詳細に見ていく方法としては、会話分析³⁾を用いることを検討している。保育者

の発話と発話の「間」や、声量の強弱など、身体を介した関わりを、会話分析の手法を用いながら対話とともに記録することで研究目的の達成を試みたいと考えている。

3. まとめと今後の課題

現時点で、倫理審査を終えデータの収集を終えられたことは、今年度の成果であると考えられる。今後の課題としては、分析方法の検討が挙げられる。会話分析を用いたデータの分析を試みている最中であるため、果たしてその方法が適しているのか、目的が明らかにされるのか今後も引き続き検討していく。

来年度は論文執筆に向け、データ分析や先行研究の検討を行っていく。

4. この助成による発表論文等

現時点では、研究の基盤となるデータの収集・整理を進めている段階であり、その後、得られた成果をもとに論文執筆を行う予定である。また、今後は国内外の学会での発表を視野に入れ、研究の発展を図る。

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の令和6年度大学院生研究助成(B)(DB2429)「身体を介した関わりと保育者の専門性との関連—子ども理解に基づく話し合いとは—」を受けたものです。

【引用参考文献】

- 1) 大豆生田啓友, 豪田トモ(2022) 子どもが対話する保育「サークルタイム」のすすめ。
- 2) 請川滋史(2016) 好きな遊びを中心とした保育を充実させるためのサークルタイム—個と個を集団へとつないでいく保育者の援助—。
- 3) 好井裕明, 山田富秋, 西阪仰(1999) 会話分析への招待。